ヒルコ神話をめぐって

福島秋穂

昔、人は多くの場合自らの容姿に似せて神を創造した。超自然的力能所有態としての神の形状を表現するに際し、未開状態にある人々は、新たな存在態を考案することが少なく、大抵の場合、可視的存在態のうち最も知的或は力能的に優れていると思われる自らの容姿を借り、其れを具象したのである。

ところが神話に於いては、神と人との形態上の類似が、

プロメテウスは大地の土を取って、それを水で煉りかためて、神々と同じ形に人間を造りあげました[注1]

というギリシア神話に見られる如く、多くは逆の論理を採って説明されている。此のように神と人との形態上の類似は、神自らが其の容姿に似せて人間を創った事に原因すると言われながらも、所詮神其れ自体が人間の思考により生まれたものであるため、其れが有する超自然的力能と矛盾して、神は其の事実上の創造者同様、死を回避することが出来ないのである。

神話と称される超自然的力能所有態を登場主体とする物語が、科学的思考をなし得ない所謂未開人の思考産物であり、然も其の人々の日常生活、亦は其の人々を囲繞する自然環境を如実に反映させたもの、或は少なくとも其れらを基礎に踏まえているものであることは、以上に挙げた神の形状・死という二点からも明らかに窺い知ることが出来る。即ち、神及び神々の行為は、其れが超自然的力能を有するものであり、其の活動の世界が超自然界であったとしても、所詮は人間と現実界に於ける其の行為の反映に他ならないのである。人間の現実界に於ける生活と、超自然界に於ける神々の生活の間には、些かの飛躍も認められない。人々が農耕に勤み、生活の糧を獲得する状態にあれば、其処には農耕に関しての神話が生まれ、海浜地帯では、漁撈生活に纏わる神話が生まれるという具合である。

*　　*

我国の文献記載神話のうち記紀に載録されている其れは、天皇を中心とする古代貴族階級の国家統治を正当化するための拠所として、古くから伝承されていた種々の神話が、其の原初的形態発生後かなりの時日を経て改作結合編纂されて成ったものであり、神代から人代へと澱みなく物語展開の場と登場者が移行する点で、ギリシアの其れなどとは大きく異なっている。しかし、記紀

編纂に際し、直接の資料となった各神話、即ち発生原初的神話は、諸外国の其れと同様、夫れ夫れ未開状態にある一般民衆が創作した物語だったのであるから、其処には其の直接の創作者である大衆の生活環境、或は現実界に於いて経験される事象に対する解釈が、如実に反映されていたに違いない。

＊　　＊

ヒルコに関する物語は、周知の如く記に於いて、イザナギ・イザナミ二神に依る国土の修理固成譚に続き、

(A) 伊邪那美命、先言二阿那邇夜志愛袁登古袁一、後伊邪那岐命、言二阿那邇夜志愛袁登売袁一、各言竟之後、告二其妹一曰、女人先言不レ良。雖レ然久美度邇興而生子、水蛭子。此子者入二葦船一而流去。

と記され、此れに相当する紀採録の記事では、まず其の一書に、

(B) 陰神乃先唱曰、妍哉可愛少男歟。陽神後和之曰、妍哉可愛少女歟。遂為二夫婦一、先生二蛭児一、便載二葦船一而流之。

と言い、更に他の異説では、唯、

(C) 陰神先唱曰、妍哉可愛少男乎。便握二陽神之手一、遂為二夫婦一、生二淡路洲一。次蛭児。

と表記している。また紀本文では、以上の三者と其の表記次第を異にし、日月二神誕生後に、

(D) (陰陽始遘合為二夫婦一。)……次生二蛭児一、雖二已三歳一脚猶不レ立。故載二之於天磐櫲樟船一而順レ風放棄。

と記し、此れと出生の順序を同じくする別の一書には、

(E) 日月既生、次生二蛭児一。此児、年満二三歳一、脚尚不レ立。初伊弉諾伊弉冉尊、巡レ柱之時、陰神先発二喜言一、既違二陰陽之理一。所以今生二蛭児一。……次生二鳥磐櫲樟船一、輙以二此船一載二蛭児一、順レ流放棄。

とある。以上の諸伝は、(C)を除き孰れも、

1　イザナギ・イザナミ二神が結婚する
2　ヒルコが誕生する
3　二神はヒルコを船に載せて流し去る

の三点を共通の構成要素としている。(C)だけ3を欠いているが、他の諸伝が孰れも其れを伝えていることからすれば、或は此れも其の発生原初に於いて、3の要素を備えていたのかもしれない。

＊　　＊

扨て、ヒルコの字義・実体に関しては、古来種々の意見が述べられている。少し長くなるが、ヒルコ研究の現段階を知るため、以下に其の諸説のうち主なものを二三挙げてみることにする。

先ず其の字義に関する説は、次の二者に大別出来る。即ち其の第一は、記紀編纂者或は其の編纂に際し直接の資料となった諸文献の原著者が、伝承記録時に本来用うべき文字とは異なったものを用いたとする文字仮借表記説である。

此の説は、「按ずるに、蛭児(ひるこ)は、日子(ひるこ)也」という馬琴説[注2]に依り代表され、近くは松岡静雄[注3]、松本信広[注4]両氏らにより継承されている。

現在私たちが眼にする記紀の記事によれば、ヒルコは「蛭」の文字を用いて表記されているが、神話発生の原初的段階に於いて、其れは人々に「蛭」以外の字を用いて表記さるべきものと考

えられていたに違いないとする所謂文字仮借表記説を主張する者は、古来非常に多く、枚挙に暇が無い程であるが、其のほとんどが、「蛭子とは音を写して蛭子と書くけれども、その意味は昼子又は日子即ち比古（彦）であって昼女即ち日女又は比売（媛）に対照してをるのである」[注5]というように、ヒルメとの対立関係に於いて其れを説明している。[注6]

ヒルコの字義に関する第二の説は、記紀両書の表記文字を其儘素直に受け入れるものである。

次にヒルコの実体に関する説を見ると、ヒルコ即日子なりとした馬琴は、日子は日之子であるとして、「日子は星也……当初星をひる子とも、約てひこともいへるなるべし、かかれば蛭子は星之神也」と言い、此の星は結局北極星に外ならぬと説いている。[注7]

此れに対し、太田亮氏は其れを人格的存在と考え、ヒルメは広大無限の徳を備えた人格者であり、恰も天地を照らす太陽にも比べられる人物であったが、ヒルコは其の兄弟であるにもかかわらず、徳がそれ程でなかった者だと解された。[注8]

蛭は仮借文字なりとしながらも、其の本来の語を日とせず比流牟とした守部は、「今俗に臆病なる者を骨なしと云やうに、上代にも怯弱なる子を厭て蛭児とそいひけん」と言い、ヒルコ即涸子とする宮坂光次氏は、「ヒルコは諸冉二神が国土生成の初頭に生み成された、まだ島ともいひ得ないやうな岩礁であって、潮の干満につれて隠現する涸子の意味であった」[注10]と、ヒルコ即岩礁説を主張されている。

更に、文字仮借表記説によりながらも、ヒルの本義は「初め」の意であるとする中島利一郎氏は、ヒルコ即長子或は第一子であるとし、[注11]「蛭児は、新しき亜細亜の黎明の前に、大日本民族の進路を示す一大聖者と看做すべきではあるまいか。蛭児こそは、実に日本の大亜細亜主義の先行者であったのである」[注12]とされた。

叙上の諸説に対し、ヒルコの語義を記紀の表記其儘に解する人々は、極めて当然のことながら、蛭の形態に基づき、其れを不具児であるとしている。[注13]

＊　＊

ヒルコの字義・実体に関する説の主なるものは、ほぼ叙上の如きであるが、其の字義・実体を文字仮借表記説より解せんとする者は、記紀に「日孁」或は「日」の文字が頻出するのに、何故ヒルコを表記するに際してだけ文字が仮借されねばならなかったのか、また記紀編纂時以前の段階に既に、「日孁」・「日」の文字を用いて其れが表記されていたのであるとするならば、何故記紀編纂の時点で「蛭」の文字に変改統一されねばならなかったのか、逆に、各資料が其の原型を留めたまま記紀に採録されたとすれば、何故其れらの出自を異にする各種文献資料が、揃って「蛭」の字を使用したのかといった単純素朴な疑問に答えていない。為に、ヒルコの実体を文字仮借表記説より出発して解釈しようとする者の説は、私たちに砂上楼閣の感を抱かせるのである。

今一歩を譲り、確かにヒルコが文献記載時に、「蛭」以外の文字で表記さるべき実体であったことを認めても、加藤玄智・高群逸枝其の他の諸氏が言われる如き、男性の太陽、或は広大無辺の徳を備えたヒルメに比較し其れ程の人格者でない者、高天原の執

政者としての資格に欠ける者が、何故放流されねばならなかったのか、男性の太陽が「脚猶不立」というのは何を意味するのかといった新たな疑問が生ずるのである。

此のようなことは、守部の比流牟子・怯弱な子という解に関しても言え、宮坂光次氏の岩礁説に至っては、ヒルコ神話構成の肝心なモチーフとの結びつきが曖昧であり、岩礁が船に載せて流されたとはどういうことか、「脚尚不立」の意を氏の説より迎えて解し、「移動せず」とすれば、他の島々も脚尚不立る理由を以て放流されねばならぬが、何故ヒルコだけが流されたのか、といった点が疑問に思われる。「脚尚不立」を叙上の如く解すならば、日月誕生のモチーフに引かれた解ではあるが、まだ馬琴の北極星説の方に分があるだろう。

一方、ヒルコ即不具児説を主張する者も、其の論拠を紀本文の「雖二已三歳一脚猶不レ立」という表記、或は一書の「此児、年満二三歳一、脚尚不レ立」という記事だけに求めている有様で、私たちに些か根拠薄弱の感を抱かせるのである。

私自身は、ヒルコの実体を文字通り蛭の如き不具児であったと考えているが、其の根拠を、ヒルコが葦船に載せられて放流されたり、三歳になっても足が立たなかったという表現だけに求めず、其の誕生に関し大きな比重を占める両親との関係からも考えてみなければならないと思っている。

*　　*

文献記載神話として今日に伝えられた前掲の如きヒルコ出生譚及び其の放流譚は、私の見るところによれば、記紀成立時或は其の成立に際し直接の資料となった諸文献出来時に、其れ一個のみが独立して伝承されていたものではなく、記紀の記録に於いて其の直前部に位置するイザナギ・イザナミ二神に関する物語と緊密に結びついていたものであり、然も記紀両書が今日に伝える、叙上二神の登場とオノコロ島の創造及びヒルコの出生という一連の物語は、其の発生原初段階に於いて既に、現在広く世界に分布していることの知られている、世界の初めを襲った洪水の物語の一として、我国に伝承されていたものが、其の前半部を落として記紀に採録されたもののようである。

*　　*

平田篤胤は、早く江戸時代に西欧諸国の神話・伝説——特に聖書の其れ——に注目し、我国の其れと比較を試みたりしたが、西欧及び中国に伝承された世界の原初に於ける洪水の話にも関心を向け、「外つ国々の洪水の時代は、皇国にては、神代の末にあたるを、いささかも、然ることの有りける状に、思ひ合さるることもなし、是を考へて、皇国の位処の、異に高く尊きことも、また漢土をはじめ、西にあたる国々の、下く卑きことをも思ひ定むべし」[注14]と発言した。此れ以後、岡正雄博士が、イザナギ・イザナミ神話の前半部は洪水神話ではないかと発言されるまでは、我国の神話・伝説の類に諸外国で伝承されている洪水譚が見えないことを訝かりながらも、其れが我国にも存在したと主張する者は全くなく、世界各国の洪水伝承を多数採集記録したフレイザーですら我国に其の例なしとしている。[注16]

しかし、全世界といっても決して過言でないほどの広域に渡り

伝承されている洪水譚を、ひとり我国だけが欠いているというのは、口承文芸の流動性或は民心の同似作用からいって、釈然としないことである。諸外国に於ける洪水伝承の存在が、或る特定地域からの伝播・流布によるものであれば、如何に島国とはいえ、他の例から推して我国にも当然其れが伝えられたはずであり、また民心の同似作用により諸外国に其れが生じたのであれば、我国とて其の例に漏れなかったはずである。更に其れが、中国――中国の其れは諸国の伝承と少しく内容を異にしているが――、朝鮮、台湾といった周辺地域に於いて伝承され、然も八重山群島鳩間島・八丈島に諸外国の其れと明らかに類を同じくする話のあることを思えば、古く我国に其れが伝えられていたとしても、何ら不都合なことはない訳である。

そこで我国の文献記載神話を仔細に眺め渡すと、どうやら岡正雄博士の指摘された如く、イザナギ・イザナミ二神に纏る物語が、世界の原初に起ったとされる洪水譚の構成要素を備えているように思われるのである。

抑々、世に洪水伝承と称される物語の構成は、

1　太初大洪水が起ったが、既に其の時人類は存在していた。
2　洪水の原因は、A人類の堕落、B偶然の出来事による、C全く自然に起る、D不明とされている、の孰れかに属する。
3　極めて少数の人間だけが生き残る。
4　此れらの人々は、A船或は筏に乗り、B高山に逃れ、C大木に登り、死を免れた。
5　洪水を逃れた者が、其れ以後の人類の祖となる。

と、孰れの地に於いてもほぼ其の要素を同じくしているのであるが、特に、原初突如起った大洪水の後、極く少数の人々――伝承の多くは、其れを一組の男女とする――が生き残り、其れ以後の人類の祖となる点では、何故かほとんどのものが一致している。

＊　＊

イザナギ・イザナミ二神を登場主体とする物語のうち、其の始めからヒルコ誕生の部分までは、

イ　世界の原初に海洋（水）の存在を認めている
ロ　二神が浮橋（船か？）上から島釣りと思しき行為をする
ハ　其の行為の結果、島（陸地）が姿を現わす
ニ　二神は此の陸地に降下（上陸？）し結婚する
ホ　二神はヒルコを産む

という諸点で、前述した洪水伝承の構成と対応している。即ち、「修理固レ成二是多陀用弊流之国一」（記）、「底下豈無レ国歟。迺以二天之瓊矛一指下而探之、是獲二滄溟一」（紀）、「投レ戈求レ地、因画二滄海一而引挙」（一書）、「有レ物若二浮膏一」（同）と記されたイの要素、及び、「二神立二天浮橋一」（記）、「伊弉諾尊伊弉冉尊、立二於天浮橋之上一」（紀）、「於是二神、立二於天上浮橋一」（同）というロの要素は、世界の原初を大洪水が襲ったこと、人々が船或は筏の如き浮遊物に乗り其の難を避けたことを思わしめ、ニ・ホの要素は、生存者の結婚と子孫の誕生に相当すると考えられる。また、前掲の洪水伝承構成要素に挙げなかったが、島釣りの結果、水中の物質（塩）を素材に陸地が造られたという要素も、洪水伝承群の一角を成す北米大陸原住民の神話に顕著なものである。

此のように見てくると、イザナギ・イザナミ二神の物語は、明らかに世界に広く分布する洪水伝承の一と考えられるもので、イザナギ・イザナミ二神を、物語創作者及び伝承者が其の原初形態発生時に、兄妹若しくは親子神であると考えていたのであれば、私たちは其の構成を全く同じくする類話を、猺族・苗族・ロロ族・カチン族・台湾阿眉族・フィリッピンのミンダナオ島タバオ地区在住マンダヤ族・インド中央部在住カヌル族・インド在住ムンダ族・上部ビルマ在住チングポウ族・南ベトナム原住民バーナー族……といった諸族によって代表される、インド・東南アジア・中国南部・台湾・朝鮮の一帯に求めることが出来る。此れらの諸地域から報告された伝承の後半部（即ち洪水発生後の物語）は、細部まで我国の其れと一致し、然も、

ララカントロチェノ二人ハ洪水ノ時臼（ドタン）ニ乗リテラガサント云ヘル山ニ漂著シ又其所ニ仮小屋ヲ建テテ暫ク住ヒシニ妹ハ何時シカ懐胎セル如クナリ数日ニシテ生レ出デタル物アリ見レバ之レナン今ノ蛇ナリシカバ二人ハ大ニ驚キテ皆叢ノ中ニ捨テケリ然ニ再ビ生レ出デタルモノアリ四足ニテ飛ビ跳ネ廻ル蛙ナリキ[注17]

という話に見られる如く、長子出産の失敗（異物出産）を重要な構成要素としているのである。我国におけるヒルコもやはり、「雖二已三歳一脚猶不レ立」とか、「年満三歳一、脚尚不レ立」と表現されていること、また上述の如く諸説諸解があるものの、其の表記に際し、「蛭」の文字が使用されていること、凡ての異伝において其れが放流されていることなどを思い合わせると、イザナギ・イザナミ二神の物語前半部は、叙上諸族の伝える洪水譚の後半部と同列範疇に属するものと考えてまず間違いないだろう。

＊　＊

もし我国のヒルコ譚が、今日私たちの眼にする如く、其の前部に接するイザナギ・イザナミ二神の結婚譚と発生原初から連続していたものであり、然も世界に広く分布する所謂洪水伝承の一であるとするならば、私たちが此処で考察の対象として採りあげたヒルコの字義及び実体は、自ら明らかになる訳である。即ち、ヒルコは、文字仮借表記説を主張する人たちが言う如く、日子或は昼子といった文字により表現される如きものではなく、記紀の表記其儘に蛭子であって、其の実体は蛭の如き子供であり、流産児とまでいかずとも、一種の身体不具児であると見て良いだろう。それでなくては、何故其れが船に載せられて流されたのかということに対し、判然とした理由を提示することが出来ない。

ヒルコが、文字仮借表記説を採る人々の説くように、其の発生原初的伝承に於いて、既に日子或は昼子であり、ヒルメに対立する存在態であったとしたならば、其の一方で皇室の祖先神とまで仰がれている日神の兄弟神が、単に足腰が立たなかったり、人徳がさ程でないというだけの理由で放流されたということになってしまい、何とも首肯けない話になる。

確かに、記紀に於いて、首尾一貫した物語の展開を見せる話に纏めあげられ、皇室の系譜を形成しながら語られる物語では、此のヒルコをヒルメに対立する存在態として解することも出来るのであるが、其れは既に完成して、今日私たちが眼にする如き所謂

高級神話に於いてのみ可能な事であり、また合理的な解釈ともなり得るのである。

しかし私たちは此処で今一度、我国の文献記載神話、特に記紀採録の其れが、皇室の系譜作成と、天皇及び其れを中心とする古代貴族階級による日本国家統治を正当づけるため、各々発生起源や内容を異にする所謂低級神話を、其の目的に応じて適宜分解或は合成し、或はまた大陸渡来の文献より得た知識を基に、新たな物語を考案付加して作られたものであり、今日では其れが恰も遙かの以前から現在私たちの眼にするが如き形で伝承されていたもののように見えるが、其れが完成する以前、或は其の作成事業に貢献するところ極めて大なるものがあった諸文献の完成以前の段階には、其の各神話が全く何の関連もなく、各自独立無縁のものとして民間に伝承されていたことを想い起こしてみなければならない。即ち、ヒルコが、記紀編纂時に其れに従事した人々により新たに考案された存在態であるということにならない限り、私たちは此のヒルコを、記紀完成の前段階に存在した所謂低級神話、一個の独立神話に於ける登場者という形で捉えていかなければならない訳である。

叙上の如く考えてくると、ヒルコ神話の発生原初に於いて、其れがヒルメに対する存在態として創作されたという事実は全くないように思われるのである。従って、前記した守部や宮坂光次説には、記紀編纂者或は其の資料作成者が、ヒルコの表記に際し、何故比流牟子・涸子の文字を用いなかったのかという素朴な疑問は残るが、少なくとも同じ蛭子即文字仮借表記であるとする日子説や昼子説より、幾らか正鵠を得たものであるということになる。

＊　＊

ヒルコが、其の表記に際して用いられた文字通り、蛭の如き子であり、然も我国周辺地域の類話に見られるような一種の身体不具児であるとしたならば、其の出生に続いて語られる、両親による其の放流譚も容易に理解することが出来るのである。

神話が、所謂未開人の思考産物であり、彼らの日常生活・生活環境を如実に反映させたものであるとすれば、其の原初形態発生の時期が古ければ古いほど、其の物語要素発生の契機をなした出来事は、一回限りのものではなく、何度も何度も繰り返して未開人の眼前で行われ、然も人々の日常生活と密接な結びつきをもったものであったに違いない。此の意味で、ヒルコ神話――特にヒルコを放流するという要素――の原初的発生を民間に求め、然も其れが文献記載時より遙かの昔から、民間で伝承されていたものであるとする限り、ヒルコがヒルメに対するものであったという説には従えない。如何に身分の高い者が放流された大事件だからといって、其れが一回限りのことであれば、どうして人々が其れを神話とし、何十年何百年と語り継いでいくだろうか。ヒルコ即日子或は昼子として、皇室祖先神たるヒルメに対立するものであるとすれば、此の誕生・放流譚は、皇室を中心とする主要諸氏族間にだけ伝承されていたものということになり、其の発生期を非常に新しいもの――即ち、皇室の社会的地位確立後、或は記紀編纂の際資料となった諸文献成立時に考案されたもの――としなければならない。けれども、私たちが前に見た如く、ヒルコ放流の

話が一個に限られず、記の伝える其れと、紀載録の一とが重複したものであったとしても、三個伝えられていることを思えば、やはり其れは古い時代に民間に於いて発生し、民間で伝承されていたものといえるのではないだろうか。

＊　　＊

残念なことに、我国の文献記載神話に於いて其の例を見ることが出来ないが、未開状態にある人々に、白子の如く普通人と容姿体型を些かでも異にする者が非常に恐れられ、また其の一方に於いて、不具児或は畸形児が嫌悪されるという事実のあったことは、北欧における「母親が変な形をした小さなもの、それはその兄弟とは似もつかないようなものを産むと、その児は自分の子供ではなくて、地下の小人どもが取換へて行つたのだと考へ……（中略）……干潮の時に、満潮の上る限界よりはずつと下の方の汀に置いて、泣こうがどうしようが、何のお構ひもなく帰つて来る」[注18]といった取り換え児の信仰からも窺い知ることが出来る。また、カリフォルニア在住のガリノメロ族は生まれてくる子が不具であれば、一様に其れを殺害していたという。[注19] 以上のような例は、世界各地の未開社会から数多く報告されている。

一方、生まれた子供が不具児ならずとも、「今日でも、幼児殺しは、ヒンドゥスタンに住むあるドラヴィディア種族が行っているらしい。同じ状態が、オーストラリア人の間で行われる」[注20]、或は「多くの民族は多くの個人と同じように、結局彼ら自身を破滅させる慣習に沈淪して来た。ポリネシアの住民は、その子供たちの三分の二を規則的に殺して来たようである」[注21]という如く、未開人の間に、出生する子供を殺害する風は多くあったようである。

幼児殺害の理由としては、アビポン人の其れの如く、夫が子を育てる母と肉体的交渉を持たないからという性的理由、或は遊牧民の場合移動の足手纏いになるからという理由、単に出産を嫌悪するという理由、等々いろいろあるだろうが、狩猟・漁撈により生活の糧を得ている民族、または農耕を知っても未だ生産量のさ程多くない民族に於いて、人口増加が重大な問題となることは容易に想像出来、其のような場合に、生まれる子供の生命を人為的に奪うということも当然あっただろう。

前に引いたような風俗習慣よりすれば、流産児は勿論のこと、不具児の放棄されることは、我国古代社会に於いても多く見られ、其れが直接の原因となって、ヒルコ放流譚が生まれたのではあるまいか。恐らくは現代と比較して、不慮の災害・疫病が多く、医療技術の発達しなかった時代に、五体満足な健康児すら死に、成人に達することが少なかったので、人々は其の事実を経験的に知り、未熟児或は不具児を扶養せず、放棄するような事も当然あっただろう。

また、私たちはヒルコ放流譚の成立事情の一として、未開人に於ける物事の因果関係が全く非科学的であり、時に天変地異による災害など予期せぬ事に見舞われると、彼ら未開人は、其れ以前において彼らの社会を律する法則を破ってなされた行為、或は一定の順序方式に従わず起った出来事に、其の直接の原因を求め、たまたま畸形児或は双生児の出産と農作物の不作が連続して起ったりすると、此の二つの事件は直結すると考えられ、以後其のよ

うな児の誕生が祝福されなかったことも考え合せる必要がある。

＊　＊

ヒルコの誕生は、イザナギ・イザナミ二神の婚姻の結果として語られている訳であるが、其の出生順序は、前記した(A)—(E)の各異伝のうち、(A)・(B)が第一子とし、(C)が淡路島に次ぐものとし、(D)・(E)の二伝では日月二神誕生後に生まれたとしている。しかし、此のヒルコ誕生譚が、もし広く世界に分布する洪水伝承の一であるとすれば、(A)・(B)の如く其れを第一子として説くものが、物語の原初的形態をとどめていることになる。

洪水伝承が、何故・如何なる人により創作され、然も何故其れらの構成が同じようになっているのか、其の分布が凡て伝播関係で説明出来るのか、出来ないとすれば、其れらは各々独立無縁に創作されたのか、等々については全くの謎であるが、其の幾つかの後部に述べられる畸形児或は異物の出産は、近親者間の結婚と其れに伴う不具児の誕生を背景に持つものであると考えられる。

抑々、近親者間の性的交渉は、ハワイやインカの王族が血統の純粋性を維持するため行い、また東南アフリカ・デラゴア湾沿岸在住のトンガ人や、東南マダガスカルのアンタムバホアカ人が、狩猟に先立って其れを行うといった特殊な例を除けば、人間が未開の状態にあった時から、世界の凡ての地域に於いて禁じられてきたようである。マリノフスキーも言うように、「土人たちの眼には近親相姦が最大の罪である。彼らは姉弟間の姦犯といふやうなことを唯単に考へるだけでも激烈な恐怖に充たされる」[注22]のである。

未開社会に於ける近親相姦の嫌悪と、其の事実が発覚露見した時、当事者に対し如何に残酷な刑罰が行われるかについては、フレイザーが数多くの例を挙げているし[注23]、我国に於いても同腹の姉弟間の婚姻が固く禁じられていたことは周知の通りである。

叙上の如く、近親者間の結婚が禁止され、嫌悪されていた古代社会に於いて、其の結果生まれてくる率の多い未熟児或は不具児の問題が基礎になって、私たちが現在考察の対象としているヒルコ誕生譚が創られたのではないだろうか。

未開状態にある人々が、近親者間の結婚と其れに伴う未熟児或は不具児誕生率の大きいことを経験的に認知し、其の事実を一個の物語に纏めたもの、其れがヒルコ誕生譚の原初的形態であり、恐らくイザナギ・イザナミ二神は皇室の祖先神などと見做される如き存在ではなく、単なる民間に於ける物語の登場者に過ぎなかったと思われる。

私たちが現在眼にする物語に於いて、ヒルコ出生の原因は、女神の男神に対する謙譲心の欠如にあるとされているが、此れは恐らく後世の理由づけであり、物語発生時には見られなかったものだろう。ヒルコは、其の両親が近親関係にあったが故に、当然の結果として生まれたのである。

我国古代の少数人間集団に於いて、かなり頻般に行われ且つ起ったに違いない、近親者間の結婚と不具児の誕生をとり扱った物語が、世に広く伝承されている所謂洪水譚の後尾に位置する少数者（時に一組の男女）の生存、及び其の後の人類の発展という構成要素に上手く重なり、此の一連の物語と、創造神による国土の出産物語とが、出産という接着点に於いて結合され、此のうち洪

水伝承の前半が国家神話構成の段階で、其の前部に中国式宇宙開闢譚を結びつけるため削除され——或は、文献記載時には何らかの理由により、既に其れは落ちていたのかも知れない——、ヒルコ誕生の因を女神の男神に先んじた発言という形で物語中に織り込んだもの、其れが今日私たちの眼にするヒルコ誕生神話の骨格ではなかったかと思われる。

＊　　＊

両親によりヒルコが放流されたという話は、私たちに、アクリシオスによるペルセウスの放流譚や、モーゼがナイル河に流された話を想起させる。勿論此れと其れとは事情が全く異なるので、同一思想より出たものとすることは出来ない。しかし、此の二つの話の根底には、未開人の水（海・川）に対する共通のある意識があったものと思われる。其れは、水が汚れに対してもつ力であり、また河海が現実世界と空想上の世界を隔絶せしめるものであるという考えである。

未開人が現実社会と異なる場所或は世界を想像する時、彼我を隔絶する中間地帯として想定するものが、常に河海乃至険阻な山谷であったことは、多くの例より明らかである。記紀の物語中においても、地上界と天上界を隔てるものとして天安河が存在し、大国主神と国造りの事業に従事したスクナヒコナ神は、遠く海の彼方の地より訪れたとされ、山幸彦の訪問した海神の宮も海坂（堺）の彼方にあるとされている。死者の世界を訪れたイザナギ神が、其の逃走の最中に放尿し、其れが河となり、迫跡者を阻止したという話も、此の思想が根底にあるもののように思われる。

此のように、河海・山谷が現実世界と空想上の界を隔絶するものと考えられていたが故に、ヒルコは恐らく海或は河に放流されたのだろう。流れ去ったヒルコは、海或は河の彼方遠隔の地に漂着し、二度と再び戻ることがないと考えられていたに違いない。

＊　　＊

以上を要するに、我国文献記載神話のうち、記紀両書に記載されているものの冒頭部に位置するイザナギ・イザナミ二神によるヒルコ出産の話は、本来不具児或は異常形態の子供が生まれた時、未開人が其れを河或は海に放流するという風習を基に創られたものであり、其れが文献記載時に、イザナギ・イザナミを主人公とする物語に織り込まれ、更に種々の物語構成要素が結びつけられ、其の一方に於いて或るものが削除され、私たちの今日眼にする如き首尾一貫した物語にまで仕上げられたものなのである。ヒルコは記紀の表記する通り、蛭の如き不具児であり、ヒルメに対する存在としてのヒルコではなく、或はまた日神と其の妻としてのヒルメの間に生まれた子でもなかった訳である。

注1　ブルフィンチ著・野上弥生子訳『ギリシア・ローマ神話』（上）—岩波文庫・二三頁。

2　滝沢馬琴著『玄同放言』巻之一上第一天象蛭児進雄。

3　松岡静雄著『日本古語大辞典』—語誌篇—一〇八八頁。

4　松本信広著『日本神話の研究』一九三頁。

5　加藤玄智著『神道の宗教発達史的研究』三六頁。

6　此れらの他に蛭を当字とし、ヒルメと関係づけて其れを説明する者に、松村武雄（『民族性と神話』三九六頁）、W.G.

Aston (“Shinto-The Way of the Gods”一三二頁)、敷田年治（『古事記標註』上巻の上に引く、甲斐国在の坂名井聡翁説）、太田亮（『日本古代史新研究』二五三頁）、高群逸枝（『大日本女性史—母権制の研究』三六二頁）、橘純一（「天石屋戸神話の成育過程」——『国語と国文学』第五巻第十一号五六—五七頁）があり、文字仮借表記説を唱えながらも、ヒルメと結びつけて其れを説明しないものに、井沢長秀著『神道天瓊矛記』（上）の日入子説—『神道叢説』二四二頁、橘守部著『稜威道別』巻三の比流牟説などがある。猶、此の他に、宮坂光次氏の涸子説、川北朝弘氏が進雄（すすのを）との対照に於いて唱える退子説があり、特異なものとしては、木村鷹太郎氏が我国の神話とギリシアの其れを結びつけて考えたヒリコン説がある。

7 滝沢馬琴著前掲書巻之一上第一天象蛭児進雄。此の他ヒルコを天象とするものに、加藤玄智氏の男性太陽説—前掲書三六頁、橘純一氏の男性太陽説——前掲書五六—五七頁、松村武雄氏の日男説—前掲書三九六頁がある。

8 太田亮著前掲書二五三—二五四頁。猶、高群逸枝氏の説も略此れに同じである。

9 橘守部著前掲書巻三。

10 宮坂光次著「蛭児説話の起因と其変遷」——『日本文化史論纂』六六四頁。

11 中島利一郎著「日本植物神話と南北文化の交流」—『学苑』第六巻第五号二八頁。

12 中島利一郎著『東洋言語学の建設』一二三頁。

13 例えば宣長は、不具児或は身体虚弱児説を主張—『古事記伝』四之巻、飯田秀治氏は骨無し児—『日本書紀新講』上巻五〇頁、辻春緒氏は不具者—『日本建国神話之研究』六三六頁、としている。此の他、吉田兼倶の不具児説（『日本書紀神代抄』）、井口丑二の早期流産児説（『高天原は近江なり』一〇一頁以下）、玉木正英の流産児説（『玉籤集』巻之三—『神道叢説』二六七頁）があり、最近では大林太良氏の説として、「手足のない子」というのがある（『日本の歴史I—神話から歴史へ』二六頁）。

14 平田篤胤著『霊能真柱』（下）—全集二・六八—六九頁。

15 岡正雄他編『日本民族の起源』四五頁。

16 J.G.Frazer; Folklore in the Old Testament.

17 臨時台湾旧慣調査会第一部蕃族調査報告書—阿眉族太巴塱社—一一三—一一五頁。

18 ベヤリング=グウルド著・今泉忠義訳『民俗学の話』—角川文庫版一九九頁。

19 レヴィ=ブリュル著・山田吉彦訳『未開社会の思惟』（下）—岩波文庫版一四八頁。

20 ウィルヘルム=ヴント著・比屋根安定訳『民族心理学』二八頁。

21 フレイザー著・永橋卓介訳『金枝篇』—岩波文庫版（二）・七八頁。

22 マリノフスキー著・国分敬治訳『神話と社会』一四一頁。